

大口真神 (オオクチマガミ)

代表役員宮司 須崎直衛

俗においぬさまと呼ばれ、当神社のご祭神を輔翼する神として、人間にふり掛る諸々の災厄・火難・盗難・病氣・殊に憑きもの等々を未然に防ぎ、ご加護頂くご神格を持たれる神として、長い間多くの信仰を集め、現在本社のみならずに当る西奥に境内末社、大口真神社として祀られております。

大口真神は狼を神と崇めた名称であり、動物学上の狼は、曾て全国各地に棲息していたと思われます。おおかみは大神の意といわれ又おいぬと敬称され、おいぬさまと崇め呼ばれたように、猛き靈力あるものとして、畏敬されてまいりました。おおかみは人間に対して庇護を与えるものと信ぜられ、狼が人について来て、道中を護ってくれたり、袖をくわえて狼の群から危難を救うなど、また送り狼の話は、近い時代にも広く信ぜられたところす。

古代の昔から神とされたことは、日本書記欽明天皇の條に、秦大津父が伊勢に商して帰る時「山に二の白狼が相闘いて血に汗れたるに逢えりき。乃ち馬より下りて、口手を洗い漱ぎて、祈請て日はく、汝は是れ貴き神にして鹿鹿行を好む。儻し獵士に逢はば、禽はれむこと、尤も速けむと。乃ち相闘ふことを抑止めて、血にぬれたる毛を拭洗ひ」清め放ち助けたとあるのによつても窺い知ることが出来ます。

当神社にあつては、景行天皇の御代、日本武尊が御東征の折、この御嶽山の地で邪神の妖霧に犯され、進路に迷わせられた時に、白狼忽

然として現われ、導き奉つて危難を免れられたと伝えられております。その縁由によつて、邪鬼、火難、盗難等、災厄からの守護神として信仰されるようになったといわれます。

大口真神のご分霊を納めた神符は、信仰される人等の邸の守りに庭内祠として、或いは神棚等に祀られ、講中にあつては、地域の守護として、社殿、祠を建てて祀り、鎮守、氏神の境内に末社とお祀りし、代々承継がれてまいりました。一年に一度、「おいぬさまのお借りかえ」或いは「ご眷属のお引替え」といつて新しい神符に祀り改められ、その姿を写した神札は、家の門口、玄関、倉、畑等に貼つてご守護いたします。そして又、ご本社の神々を奉斎するのに代えて大口真神のご分霊を祀るのが、殊に講中では古来一般的に行なわれていることと見られます。

現実の狼は明治三十八年(一九〇五)絶滅したといわれます。然し大口真神の信仰は御嶽信仰の大きな要素として、本社御祭神と表裏一体となつて続いて来たものと思われます。

本社の御祭神の大きな神格に比べ、おいぬさま、ご眷属と呼ばれる大口真神へのご信心は、大神の持たない、身近な神として親近感を以つて、信徒の人達に迎えられて来たものと申せましよう

なお秩父の三峯神社・両神神社、静岡県山住神社、奈良県玉置神社などでもおおかみが神使として祀られ、神札が出されております。

〔連載〕武州みたけの信仰②

山高きが故に貴からず

国学院大学教授
神道学博士

三橋 健

前号では、「みたけ」の「たけ」は「岳」または「嶽」と表記され、それは「高い山」との意味であり、人々はそのよいな「高い山(岳・嶽)」に対して畏敬の念をいだき、これらに「み(御)」という語を添えて、「御岳」「御嶽」と尊称してきたと述べた。

ところが『実語教』という道德の教科書の冒頭に、「山高きが故に貴からず、樹有ルヲ似テ貴シトナス」(原文は漢文)との語句がみえる。すなわち「山は、ただ単に高いからというだけで尊いのではない」というのである。これは要するに、見せかけより中身の大切さを山にたとえていったものであるが、武州みたけの信仰をたずねる上でも重要な語句であるといえよう。

ちなみに『実語教』とは平安末期から明治初期にいたるまで、広く用いられた児童むけの教科書である。作者は弘法大師空海といわれているが、確かなことではない。

わずか九十六句(一句は五字)より成る短篇で、寺子屋や家庭教育の教科書として大いに用いられた。幼童に学問と道德的実践を勧めるといふ内容になつてはいるが、外見より中身の大切さを諭し、また「財」は滅ぶが「智」は不滅であるなどの教訓は、現代の日本人への警鐘のようにも聞こえる。

「みたけ山」への再認識

我々の祖先が、この山を「みたけ」と尊称したことを改めて理解しておくべきであろう。つまり「たけ」ではなく「みたけ」と呼んだところに奥深い意味がある。

前号でも述べたように、「みたけ」の「み」は「御」であり、それは神仏など、貴いものに対して敬意を表した語である。この山を「みたけ」と呼んだのは、この山が古来、神の山であると信じられてきたからにほかならない。

『実語教』の語句を引用するまでもなく、武州みたけ山は、ただ単に高いから貴いのではない。それはこの山のもつ実質的なもの、つまり中身に對する尊崇である。だから人々は「たけ」と呼び捨てにしないで、「みたけ」と尊称してきたのである。

かりに武州みたけの信仰が、ただ単に「たけ(岳・嶽)」に對するものであつたならば、それはうわべだけの見せかけの信仰に終わり、やがては歴史の流れのなかで消え去つていったに違いない。

私どもは、ここに改めて、この山が「たけ」ではなく、「みたけ」であることを再認識しておく必要がある。そして「たけ」ではなく「みたけ」と尊称してきた中身について深く考えてみなければならぬ。その中身は武州み